

人は「育てる」ものじゃない 「育つ」環境をつくり、待てばいい

宮大工棟梁 小川 三夫 × ジャーナリスト 池上 彰 (聞き手)

修学旅行で訪ねた法隆寺建築に魅せられて、
宮大工の道へ。
小川三夫さんが、「最後の宮大工」と呼ばれる西岡常一棟梁の門をたたいたのは、18歳のときでした。
ひたすらな修業の日々が始まります。
なぜ、下積み時代の生活に没頭できたのか。
なぜ、5年で仕事を任せてもらえたのか。
そして今、小川さんのもとの、若い弟子たちが共同生活をしながらどのように育っているのか。
小川さんがものづくりへ込める精神と人の育成の神髄を語ります。

●「一三〇〇年前にどうやって、法隆寺ができたのか不思議で、そういう仕事に就きたいと思いました」

池上 小川さんは「法隆寺最後の宮大工棟梁」と呼ばれた西岡常一さんに弟子入りされて、今日があるわけですが、そのきっかけは高校の修学旅行だったんですね。

小川 ええ。修学旅行で初めて法隆寺に行き、五重塔を見上げていたら、「この塔は一三〇〇年前に建ったものですよ」と説明が聞こえた。一三〇〇年前に、どうやってこんな大きな木材を運び、また、塔の上にある相輪（金属製の飾り）を上げることができたのが不思議で仕方なかった。それで、「ああ、こういうことに携わる仕事もおもしろいのではないかな」と思いました。

池上 なるほどね。

小川 当時はロケットが月に向かう時代。宇宙開発にはたくさんのデータをそろえてから事にあたりますよ。しかし、法隆寺などは違う。先にデータありきじゃない。きつとできる、造ろうと思う人々の信念でできた。こういうものを造った大工さんの血と汗を学んだほうが、大学に行くよりずっといいんじゃないかと思いました。

池上 そこで、奈良県の教育委員会にどうすればいいか、聞きに行かれたらしいですね。すごい行動力ですね（笑）。

小川 ええ（笑）。「こういう仕事をしたいんで、お世話願います」と言ったら、「法隆寺には西岡榘光（みづみ）という棟梁がいる」と教えられた。常一さんのお父さんです。

それで、法隆寺に行つて、「西岡さんはどなたでしょう」と聞いた。実は下の名前を忘れていたんですよ。そこで「西岡の誰だ？」と出てきたのが常一さんで、「おれが西岡だ」というのが出かいで

した。

もし、私が名前を覚えていたら、弟子入りを断られていたでしょうね。その頃、榘光さんは八〇歳くらいでしたから。名前を忘れていたのが幸いで、弟子入りが認められ、この道へ進むことができました。そういつたのも、運なんですよ。

池上 小川さんのお父さんは銀行員ですよ。職人になるのに反対はされなかったんですか。

小川 親父は、「おまえの考えは川をさかのぼるようなものだ。つらいだけで、周りの景色はひらけていけない」と言われました。でも、「自分は、それでもいい」と。あとは「勝手にせい」でした。

西岡棟梁も同じようなことを言いましたね。「自分は川の中に打ち込んだ杭だ。必死に流れにさからってなくちゃならないんだ」と。ああ、棟梁と親父はちょうど年が一緒ですね。

●「ゆがんだ性格は自分でなければ直せない。どの人も師匠と思って、接していました」

池上 西岡さんのところで修業する前に、長野の



池上 彰さん 小川 三夫さん

仏壇造りの親方の元で修業されることになったんですね。

小川 西岡さんに「道具が使えるようになれ」と言われて、自分で探して行っただけです。昭和四十一年、十八歳の頃でした。

池上 そこでは、どんな生活だったんですか。

小川 いわゆる徒弟制度というもので、親方と寝食をともにする生活で、全てが初めての経験でした。食べさせてもらって仕事を教えてもらうんだから、家事もしなくちゃいけないわけですよ。野沢菜漬けの手伝いなんかもさせられました(笑)。毎日、その家の赤ん坊を背負って、買い物にも行った。同じくらいの年の子に会うとそれはもう恥ずかしくて。周りの環境との違いも感じてしまう。しかし、そういう生活をずっとしていくと、いじけますね。

池上 本当は大工としての技を磨くために行っているのに、使い走りをさせられるわけでしょう。

小川 はい、その頃は本当にゆがんでいましたね。そういうゆがんだ気持ちのまま、ちょうどその年の正月に帰省しました。そのときに、母親は自分だけに鶏肉を出してくれたんですが、それにすっごく腹が立ってね。自分にだけ用意されていたから、特別扱いされたというのが逆に腹立たしくなっちゃって。母親に皿ごとぶつけました。

池上 外で苦労している分、たまに家に帰ってくれば、そうしてやりたいのが親心でしょう。

小川 ええ。それなのにぶつけた。それぐらい、もう計り知れないほどゆがんでいるんですよ。でも、それは自分自身で直さなくちゃだめ。人には絶対直してもらえないですよ。

池上 小川さんは、なぜ「ゆがみ」を直せたんでしょうか？

小川 ゆがんだままでは、世の中で通用しない。修業中なんですから、どこへ行っても、どんな人も「師匠」と思って接するようにすれば、いろんな考えを受け入れることができると思えられたからでしょう。

それと、この仕事が終わったら、また西岡棟梁の元へ行こうと思っていたのが大きいんじゃないかな。

池上 この先、行きたいところがあるという、はっきりした目標が心の支えになったと。十代で心がゆがんじゃうって、今の若い人の中にもいますよね。どうすれば、脱出することができるのですかね。

小川 「今やっていることが、本当に充実しているな」と自分で思えるようになれば、自然にゆがみも消えるんじゃないかな。そういうものが持てるようになれば、いいですよ。

●「ひたすらに刃物研ぎだけをやれと言われた。ある日、素晴らしい鉋屑を見せられて……」

池上 仏壇店の修業が一年。その後、ようやく西岡さんの元へ行かれたんですね。

小川 西岡棟梁に会いに法隆寺へ行っただけです。ところが、仕事がなかった。そのとき、ちょうど西岡棟梁のところに、文化財の監督で古西武彦という方が来ていた。そうしたら、その方の紹介で、島根の日御碕の日御碕神社の修復で図面描きの仕事があるから、そこで面倒をみてくれることになった。普通の技師なら三カ月ぐらいで描けるような図面ですが、自分は見よう見まねで描かなくちゃならないから、一年半かかりましたよ。

池上 今、製図をやるなら基礎から専門学校や専門高校で習いますよね。

小川 そんな勉強、全然やったことがない(笑)。先輩が描いた図面を見せてもらって、同じようにやれば描けるんです。建物をきれいに写し取ればいいわけですから。図面からものを造るんじゃないかな、あるものを正確に写し取る。そうすれば、何かがあったときに、その図面を見て、また元に戻せるでしょう。

池上 建っているものを図面にするって、とても考えつかないですね。小川さんは著書の『棟梁』で、人は「育てるんじゃない、育つんだ」とおっしゃっていますが、まさにご自身が図面描きを手取り足取り教わるのではなく、自分で学んでいったわけですね。ご自身で育っていったわけだ。

小川 誰も教えてくれないというのであれば、もう自分でやるしかありませんからね。

池上 なるほど。その後はどうされたのですか。

小川 日御碕神社が終わって、兵庫県豊岡市にある酒垂神社の修理をしていたときに、西岡棟梁から、これから法輪寺の三重塔の仕事があるから来てもよろしいと連絡がありました。初めて西岡棟梁に会って丸三年経った時のことです。西岡棟梁にそう言ってもらえるまでにそれだけかかったんだ。

池上 すぐに仕事はさせてもらえたんですか。

小川 初めに棟梁から言われたのは、「まず納屋の掃除をせい」ということでした。納屋に行ってみると、これからやる引きかけの図面がある。大工道具も揃っている。それらを見てもよろしいということですね。ああ、これでやっと弟子入りが認められたんだなと思いましたね。

池上 なるほどね。

小川 その次に「一年間は新聞、ラジオ、テレビ、一切目をくれるな。ただひたすら刃物研ぎだけを

しなさい」と言われたんです。

池上 小川さんは、著書の中でも刃物を研ぐことが大切だとおっしゃっていますね。

小川 それが、大工の本当の仕事です。それしかないんです。勘を教えるとか、コツを教えるということはできない。勘やコツなんて、その人が感じ取らなくちゃならないんですよ。しかし、それ以前に、大工ですから、刃物が切れなかつたら絶対に無理。

刃物が切れるようになれば、いい材料をあてがい、いい仕事をしたと思うようになるんですよ。

池上 切れ味鋭く、手入れが行き届いている刃物を持っている人なら、仕事を任せても大丈夫だなという気にもなりますよね。

小川 修業中は、仕事だけでなく、日常生活のあらゆることから、段取りを考えるようにしつけられるんです。毎日、飯を食べるにも、ご飯、汁、菜、と最後がびったり一緒に終わるように食べなさい、という具合でした。

池上 学校給食の現場で言う「三角食べ」ですね。

小川 そう、配分を考えながら食べなくちゃならない。一カ月ぐらいい、食べた思いがしなかつた(笑)。

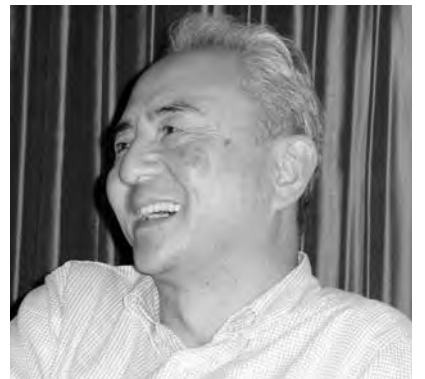
そんな生活が三カ月ぐらいい続いたとき、棟梁が納屋にやってきて、鉋屑を削ってくれたんです。本当に真綿を広げたような、向こうが透けて見えるきれいな鉋屑でした。その鉋屑をずっと窓に貼っておいて、そういう鉋屑が出るように研いで削り、研いで削りして、毎日、鉋がけの練習。

池上 同じような鉋屑が削れるようになるまでどれくらいかかりましたか。

小川 一年ぐらいいかな。

池上 一年で追いついた……。

小川 しかし、今思うと、手本を示してくれたの



よいよ仕事を任されたのですね。

小川 法輪寺の仕事でしたが、ちょうど薬師寺金堂の上棟式前で西岡棟梁が関わられなかったので、私が、棟梁代理を任された。西岡さんについてから、五年も経っていない頃ですよ。何もできないと思っただけで、棟梁が行けと言うから行って、やりました。二十六歳のときです。

池上 棟梁代理ということは、大勢の職人さんに指示をして仕事を進めていくわけですよね。「とてもおれにはできねえ」と思いませんでしたか。

小川 いや、こういうふうにすれば造れるということはわかっていましたから。

池上 それだけの力がついていたから、西岡棟梁も行けとおっしゃったんですね。西岡さんの人の使い方を見ていて身につけたところはありますか。

小川 いや、棟梁は棟梁の考えでやっていましたね。ただ、棟梁自身が自分を任せてくれたように、自分もそうでなければいけないと思いました。未熟なうちに任せるといふことの大切さを実感しました。

池上 では、小川さんにとって西岡棟梁とは。

小川 西岡棟梁というのは、「古代工人の魂と技を受け継いだ人」ですね。「最後の宮大工棟梁・西岡

は、それだけ。ただ、一緒に生活していたので、いろいろなことを学ぶことができましたね。

池上 そういう生活を送り、経験を積んで、い

常一」と呼ばれますが、宮大工はいっぱいいる。自分も技は棟梁ぐらいいまでは行けるだろうと、思いますよ。でも、法輪寺を造った古代工人の魂は絶対受け継げない。その点、西岡さんは全く違います。

池上 何が決定的に違うんですか。

小川 やっぱ古代工人の魂です。そりゃそうでしょう。法輪寺という、あれだけのものを支える代々の宮大工の家に生まれているのだから。

池上 物心ついたときからずっと法輪寺を見続けて、古代の人の魂と対話し続けてきている。

小川 そうです。それを守らなくちゃならないと思っている人だった。根性のすわり方とか、魂が全然違いましたね。おれは、どんなことをしても絶対そこまでは行けない。

●「食える大工になりたい」と独立。弟子を採る基準は『能力のない者』からです」

池上 小川さんは西岡さんのお弟子さんでありながら、ご自身でもお弟子さんを採られたわけですよ。それはなぜですか？

小川 法輪寺が終わって、薬師寺に戻って三重塔の図面も描き終えた。それで「独立します」と言ったんですけど、現場が進まないから呼び戻された。全部終わったところで、独立して鶴工舎いかりがどうしゃを始めたんですが、弟子を採った理由は簡単で、宮大工の仕事は大きな木材を使うからなんです。二人で材木を持って、下に台を置く人間がもう一人いる。だから、最低二人は弟子をつくらなくちゃいけないと思った。

池上 そういう物理的な理由ですか。

小川 ただ、それだけです(笑)。独立したのはいいけれど、初めのころは仕事なんかなかったね。

しかしありがたいことに、東京のお寺さんが、西岡さんの弟子だから悪いことはしないでだろうと、仕事をくれたんだよね。それから仕事が増えて、人が足りなくなってきた。

池上 お弟子さんもだんだん増えたんですね。ところで、なぜ、独立して鵜工舎を設立されたんですか？

小川 西岡棟梁から常々「この仕事をして、食えないよ。嫁さんももらえない」と言われましてね。ならば、自分で食べる大工になればいいと思っただけなんです。食べる大工になるには、自分で事業を起こさなくちゃだめですわね。それを作り始めたわけです。昭和五十二年の五月に会社（鵜工舎）を興したから、今年で三十二年目です。今は二十五人の弟子がいます。

池上 現在でも、宮大工に弟子入りしたいという人たちが来るんですか。

小川 うん、来ますね。十年前くらいは、年に三百人ぐらい、今は五十人くらい来て、その中から辞めていった者の分だけ補充するという感じですね。

池上 弟子入り希望者から、選ぶ基準は何ですか。

小川 能力のない子から順に採ることです。

池上 どうしてですか。能力のある子から採るほうが、仕込むのは楽じゃないですか。

小川 違うんですわ。三、四年前こんなことがありました。早稲田大学の文学部を卒業する子と、中学生の子が弟子入りに来たんです。それで面接して、大学生のほうは断った。なぜかというところ、その大学生はうちで採らなくても、ほかの道で生きていけるからです。

小川 中学生のほうはまだ能力がないから、ここでしか採れない。一人前になるまでの十年ぐ

らいの修業は物凄く大変だ。そのときに、自分はこのじゃなくても、別の道でも生きていけると思ってしまうと、もうだめなんですな。ほかを見せしめよう。

池上 なるほど。「ここしかない」という気持ちを持てるかが、採用基準なんだ。

小川 修業が苦しくなったら、必ずよそを見ますよ、友達がうらやましく思える。自分はほかの道でも能力があると思っていると、今の仕事に浸ることはできないな。やっぱ底が浅くなる。

●「木は木のなりにしか育たない。環境をつくってやれば、大きく育つのです」

池上 著書の中で人は「育てるんじゃない、育つんだ」とおっしゃっていますが、どういうことですか。

小川 「育てる」という言葉には、無理がないですか？「育つ」というのが自然でしょう。

池上 木がそうです。「育てる」というのは苗木を植え、水やりをして、枝打ちをして……、と人が手をかけていくことだ。

池上 しかし、ただそのまんま「育つ」のを待つのは、大変ですよ。木は木のなりにしか育たないんです

ら。扱いにくい木になるかもしれない。

池上 そのときに大事なのは、場所、つまり環境です。例えば

一本の木が四方八方から

日を浴びて育

つと、下枝がいっぱい出てしまう。ふしが多くて、そんな木は使えないですね。

池上 ところが、大きな山の中で放っておくと木は使える木になるんですよ。森の中で下まで光が当たりませんから、余計な下枝が出ない。そうやって、大きく立派な木に育ちます。

池上 大きく育つ環境をつくってやらなければいけないということですね。

小川 そうです、環境なんです。人も木も同じです。だから、鵜工舎では何にも教えない。教えるくてもいいんですよ。なぜなら、鵜工舎には学ぼうとする雰囲気がある。学ぼうとする雰囲気の中にいけば、自然に育つから放っておいてもいい。その子らが、どんどん自分たちで一生懸命やっていく。そういう環境がないところの子は「育て」なくちゃいけないんです。

池上 今でも鵜工舎ではみんなで寝泊りする集団生活ですが、嫌がりませんか？

小川 今の子は個室で育っていますから、プライバシーがないのが一番参るんですね。それに一番下っ端の子は飯当番。大工の仕事はできないけれど、先輩のためにできることといたら、飯作りと掃除だから、そこから始まる。食事を作らせると、その子の段取りのよさや、性格、相手への愛情というのがわかります。思いやりがなかったら飯は作れないから。

池上 すごい子がいたね。「ご飯できました」と言うけれど、おかずがコンニャク一切れ。「なんだこれ、おかずか？」「はい」そんなときは怒ったよ(笑)。

池上 そういう子を相手にしていくのは大変ですね。育つ環境をつくるにしても時間がかかるでしょう。

小川 時間はかかります。しかし、料理のうまさ



と、仕事のうまさは比例しますわ。うちは食事を作るのに三十分しか与えません。仕事が終わって、夕方六時半から全員の食事を作って七時に食べ、片付けてから買い物。そして、次の日の下ごしらえをして十一時。その後、刃物研ぎの練習で、二時ぐらいまでかかりますね。

池上 朝になれば、現場へ行かなきゃいけない。

小川 それをこなすには、すべて段取りなんです。段取りができない子はついてこられません。

現場では毎日、毎日、掃き掃除。そうやって何も教えないで来て、ある日その子の前で、きれいな鉋屑を削ってやるんですよ。初めてそれを見ると「ああいうふうな鉋削りをしたい」と思うわけだ。思いつきりそう思わせるんですよ。そこで初めて、「鉋貸してやるから削ってみる」と言う。そりゃ、うれしくて削りますわな。その夜から人が変わったように刃物を研ぎますよね。そこまで我慢しなくちゃだめ。

池上 そこなんですな。

小川 その我慢なしに、教えても絶対できない。できないことをやれば、苦痛にしかならないですよ。でも、自分でやりたい、やりたいと思っただけで、うれしくて仕方ないでしょう。

池上 そうか、なんで掃除や炊事ばかりさせられているんだらう、早く大工仕事をやりたいなという思いをためておくからこそ、初めて喜びがわかるんですな。

●「学ぶのは面白いと思わせるのが教育だね。」

そのためには、先生もタフじゃないとだめだよ

小川 「学ぶのは面白い」とわからせてやれば、もう何もなくていい。それが教育だね。外から詰め込もうとするから、だめになってしまう。

池上 自分が本当にやる気になったところで、手本を見せてやれば、目的がはっきりしますよね。

小川 学校でも小学校三年生ぐらいまではベテランの先生が受け持つべきだと私は思うんです。それで、「勉強をするのは面白い」と子どもたちに思わせなくちゃだめ。先に知識だけを与えても伸びませんよ。

池上 「勉強って楽しい」と思わせることが先。その後、小学校四年生ぐらいから「鉋削り」をすればいいと。なるほど。

最後に先生方へのメッセージをいただけますか。

小川 教える立場の人で一番大切なのは、とにかく疲れないということですね。人を教えるには大変なエネルギーがいる。今、現場の先生はいろいろなことに疲れていらっしやるでしょう。しかし、教える立場の人が疲れていては正しい判断が絶対できない。だからこそ、心も身体も健康でなくちゃだめですよ。

池上 やらなきゃならないことが多くて、疲れている先生が多いですね。

小川 教えるにはタフでなくちゃだめですね。

それと、弟子を使って一番大切なのは、素直かどうかなんですな。なぜかという、教えるほうも教わるほうも、お互いが疲れないからですよ。素直じゃない弟子が何か言ってきたら、何を言いたいのか理解するまでが大変ですもの。

池上 そりゃあ、そうですね。

小川 素直な気持ちになれない子もいる。せっかく弟子入りするんだから、ゼロから入れればいいのに、中途半端な知識を持って知ったかぶりして来るんだよ。そうすると、最初はいいが、やがて頭打ちして、ぐっと下がるんです。そういう子は、素直なものに触れられるようになるまで怒らなく

ちゃだめなんですわ。それをやるには、向こうも大変、こっちも大変ですよ。しかし、素直に触れられるようになれば、またぐっと上がりますわな。

池上 怒るのもエネルギーがいりますからね。

小川 知識が悪いというわけじゃないんですよ。知識があっても、素直に学べる子が一番ですね。知識を持ったまま、大きな顔をしてやっているような子には、きちんと向き合っただけを直さないとね。

池上 なるほどね。今日は面白いお話をありがとうございました。

編集部より

小川三夫さんの著書『棟梁』を抽選で3名様にプレゼントいたします。ご希望の方は、同送のアンケートハガキを弊社宛までお送りください。

●小川 三夫（おがわ みつお）

1947年栃木県生まれ。栃木県立氏家高校卒業後、西岡常一棟梁の元へ。一旦、長野県飯山市の仏具屋へ弟子入りし、1969年、西岡棟梁の内弟子となる。法輪寺三重塔、薬師寺金堂、同西塔の再建に副棟梁として活躍。1977年、鶴工舎を設立。国土安穩寺、国泰寺など全国各地の寺院の修理、改築、再建、新築の設計・施工、模型製作などにあたる。著書に『棟梁』（文藝春秋）、『木のいのち 木のこころ』（共著・新潮文庫）など。

●池上 彰（いけがみ あきら）

1950年長野県生まれ。慶應義塾大学卒業。1973年にNHK入社。報道記者として勤務。1994年から11年間「週刊こどもニュース」のお父さん役を務め、子どもたちにニュースをわかりやすく解説。2005年NHKを退職。現在はフリージャーナリストとして活躍中。著書に『池上彰の「世界が変わる！」』（小学館）、『そうだったのか！現代史』（集英社）、『池上彰の社会科教室』（帝国書院）など多数。